

まちづくり横浜の総合化と田村明一研究会 第3回研究会 記録

2014年7月25日（金）午後6時30分より9時

開港記念会館 9号会議室

文責：田口俊夫、奥津憲聖

（敬称略）

田口：今日、ゲストでお二人の方に来ていただいています。環境開発センターの元所員であられた、二宮公雄さん、それと氏家隆正さんです。今日のメインのスピーカーは二宮さんをお願いしています。二宮さんの方から、浅田孝さんがお作りになった環境開発センターというのはどういう事務所だったのか、そしてどのような仕事をされてきたのか、そしてどのような影響を日本の社会に残したかを語り合いたいと考えます。そして、その環境開発センターに途中から参加された田村明さん。今途中と言いましたが、ほぼ初期の段階から参加されていたというふうに理解していますが、田村明さんとほぼ同時期に二宮さん、そして氏家さんが共におられたわけですが、どのような働きを田村明さんがされたのか、というあたりを色々と語っていただけたらというふうに思っております。そして今日の研究会は今までと同じように録音させていただき、テープ起こしをし、それをこの研究会のホームページに掲載していきます。そしてその資料を今後広く研究をされる方々、あるいは田村明をより深く知りたい方々、そういう方々に提供していきたいというふうに思っております。では、最初二宮さんをご紹介いたします。今日のゲストスピーカーであります二宮さんでございます。

二宮：どうぞよろしく願いいたします。

田口：それから後ほど少し話を伺わせていただきます氏家さんです。よろしく願いいたします。では、私のほうから、環境開発センターが時系列的にどういうふうに、いつごろつくられ、どういう仕事をし、最終的にいつその事務所を閉じたか、というあたりを田村明さんの動静をそれに加えた資料をつくりましたので、若干ご説明いたします。それと二宮さんの方から皆さんのお手元でございますように今日のレジュメがお配りしてございますので、それに基づいて後ほど二宮さんの方からお話をお聞きしたいと思っております。なお、二宮さんは田村明さんが横浜市に移られてからも、長年にわたり、田村さんが横浜市をお辞めになった後も長期にわたり横浜のまちづくりに都市計画のコンサルタントという立場でずっと関わってこられました。そういう視点ものちほどお聞きできるというふうに思っております。

ではお手元の「環境開発センターと田村明・環境開発センターの主要業務」を簡単にご説明いたします。環境開発センターが設立されたのは、1961年4月です。浅田孝さんは常に「地域計画エキスパート」ということを環境開発センターでした仕事の報告書の前に

常につけるのを旨とされていたということです。都市計画コンサルタントではあるかもしれませんが、我々はエキスパートなんだ、ということ常々言われたということでございます。1961年4月前に実はここに書いてあります4つの事象がありました。浅田孝さんがまだ丹下研究室におられた時代ですが、香川県知事・金子正則知事から香川県の庁舎を丹下さんが設計の依頼を受けた。それが1953年です。そして1958年には浅田孝さんは東大の丹下研究室の主任研究員と早稲田大学の講師をお辞めになっております。同時に、世界デザイン会議の事務局長に就任されています。そして世界デザイン会議は1960年に東京で開催されました。その場でメタボリズムグループが結成され、メタボリズムグループの研究発表といいますか、活動発表が世界デザイン会議の場でされたということでございます。そしてその翌年、1961年4月です、環境開発センターが設立されました。この資料を書く上で、参考にさせていただいたのが、つい最近出版された笹原克さんがお書きになりました『浅田孝一つくらない建築家、日本初の都市プランナー』という本です。それに基づいて書いてございます。その中で、出発当時は千駄ヶ谷のマンションに事務所を持ち、唯一の所員が氏家さんであるというように書いてございました。所長の浅田さんと、浅田さんの奥様、そして氏家さん、という感じだったのでしょうか。

もともと環境開発センターは、この前二宮さんからお聞きしたように、私の思い違いでなければ、豊橋出身の三名の方と浅田さんが共同出資しておつくりになったということのようでございます。その後、香川県の観光開発計画の仕事がされています。当時田村さんもまだ日本生命に在職されておられましたが、休暇をとってこの仕事を手伝いにいったというふうに書かれています。その後、香川県の他の計画、こどもの国、それと高速自動車の道路標識システムの設計等々がございます。

1962年8月付で、これは我々のホームページにも掲載しましたが、田村さんから「地域計画機関のあり方」というペーパーが浅田さんに出されました。これからの地域計画機関はこうありたいと、こうあるべきだというペーパーが出されています。そして、その中で田村さんは総合性を強く主張されたと。事務所には総合性がなければいけないというふうに書かれております。

そして、環境開発センターの事務所が銀座に移転しました。これは田村さんが入る直前ぐらいですかね。そして、株式会社のその会長に仁谷正雄さん、これは富士銀行の常務で芙蓉開発株式会社の社長であります、が就任されています。社長に浅田孝さん。芙蓉開発が所有している銀座のビルに移転されたということでございます。

そして1963年1月に田村さんが入社されています。その直後に田村さんは、結構な期間ですが53日間のソ連・東欧・ヨーロッパ視察団に参加されています。この時の視察団に参加した時の詳細なメモが横浜市の市史資料室に寄贈されています。これは近々副本ができますので、みなさん閲覧することができます。非常に詳細に書かれた、田村さんの自筆でございますが、視察報告書メモです。ソ連の工場を見たときの状況、こんなことがあったあんなことがあったということが書かれています。

横浜に入る前にもいくつもの横浜市関係の調査報告書をお出しになっています。一番重要なものは6大事業、最初は7大事業だったんですが、「横浜市の将来構想」1964年、昭和39年ですね。昭和38年に飛鳥田さんが当選されてますから、飛鳥田さんが当選直後に、横浜のまちづくりを実践的に組み立てなりたいということで、浅田さんをお願いされたということだと思います。その中で実際に担当されたのは田村さんでした。ここについても後程二宮さんからお話をお伺いできるかなと思っております。そして、各地の色々な計画をおやりになっています。これはまたご覧になっていただくとして、こんなこともやっているのか、あんなこともやっているのか、ということがございます。この中で香川県のものが目立ちますが、香川県はちなみに浅田さんの出身地でございます。香川県の金子知事は相当長く知事をおやりになりましたが、金子知事に非常に気に入られて、色々な仕事をおやりになっています。

次のページにございますが、田村さんは横浜市に1968年4月、これは昭和43年ですが、転出されております。と同時に、田村明を囲む顧問会議、これは私の勝手な言葉ですが、浅田孝さん、高山英華教授、八十島義之助教授、河合正一教授を参与をお願いして、顧問と同じふうに理解していただいてよろしいと思いますが、定期的に月に一回くらいですか「木曜会議」というのがこれなのかなと思っていますが、後ほど、1時間ほど遅れて横浜市大の鈴木伸治先生が今日参加していただきますので、鈴木先生が非常に詳しくご存じでございますので、お話を補足的に語っていただくことになると思います。

そして、その後、環境開発センターでは、ここに書いてありますような全国各地の計画をされておられます。そして、大阪の万博や沖縄海洋博も当然関与されてますが、この中には特に総合研究開発機構(NIRA)の設立を浅田さんが総理府に依頼を受けて、日本を代表するようなシンクタンクをつくりたいと、ということでその設立に深く関与されたというふうはこの笹原さんの本に書かれておりました。

このようなことがあり、横浜市では1978年、昭和53年、田村さんが企画調整局長を解かれ、技監のみの職ということになりました。そして、環境開発センター自体は翌年の1979年に閉鎖されております。浅田さんはトヨタ財団の専務理事に就任されたのは1987年でございますが、1990年までトヨタ財団の専務理事をお勤めになっています。浅田さんは1990年、亡くなっておられます。このような流れでございます。では二宮さんにレジュメに基づいてよろしく願いしてよろしいでしょうか。

二宮：それでは、私の方は二枚綴じたもので『浅田孝と田村明』話題提供メモ」ということで準備をいたしましたので、この流れで一応お話しさせていただきたいと思います。内容としてはまず、浅田孝、田村明この人たちがどんな人だったか、それから環境開発センターに対してどういうことを考えて、どういう組織で仕事をしたか、そのあたりのことについて最初に聞いていただきまして、その次は環境開発センターで創立の時に色々な理念を持って始めているわけなんですけれども、具体的に環境開発センターで策定したプロジ

エクトの中で、どういうところが特色があったといえるのか、そのあたりについて 2、3 の計画案をもとにして、少しお話しさせていただきたいと思っております。それから 3 番目に横浜市で 6 大事業が始まって、それ以来ずっと一貫したまちづくりが続いているわけなんですけれども、横浜市に届ける前の環境開発センターの中での横浜の長期ビジョンについて、送り出す側の状況について若干触れて、その 3 つを中心にして話題提供ということにさせていただきたいというふうに思っております。最初に、点線で囲った枠がありますけれども、先ほど田口さんの方から環境開発センターとそれから色々なプロジェクトそれから田村さんの動き、そういうことについて年表的にご説明があったんですけれども、まあ、ここで私がお話しさせていただくのは、この一番上のところに三行書いてありますけれども、この期間のことが中心ということになります。1961 年に浅田孝が環境開発センターを設立、この時浅田孝さんは 40 歳だったようです。それから二年経って 1963 年に田村さんが入社されて、その時が田村さんが 36 歳。それから、1968 年に田村さんが退社して横浜市に入られるわけなんですけれども、この間の田村さんの環境開発センターの在職年数が 5 年 3 か月です。私については申し上げますと、田村さんの入社退社のちょうど間にサンドウィッチみたいになってまして、1965 年だったと思います。1965 年の 3 月に入社して、1968 年の 2 月だったと思いますけども、田村さんよりちょっと前に退社しました。そういうことになってまして、色々なプロジェクトの策定とか、そういうのがあったわけなんですけれども、時間的に見ますと、この環境開発センターの色々な計画を世に送り出した期間というのは、何か一瞬の輝きみたいな感じがしております。非常に短い期間の中で、非常に濃密な時間だったんじゃないかなと。田村さんに関して言いますと、田村さんを偲ぶ会が、横浜のクリエイティブセンターで以前ありましたけれども、あの時に私が弔辞といえますか、思い出として述べさせていただいたんですけれども、環境開発センターの時代というのは田村さんにとって、都市プランナーの青春時代だったのではないかなと。そんな感じがしております。

1. 浅田・田村と環境開発センター

●浅田・田村の出会い・交流とそれぞれの個性

まず最初の「浅田・田村と環境開発センター」ということなんですけれども、田村さんはこれはたぶん学生時代の初めて浅田さんに会ったときからのことだと思うんですけれども、非常に浅田さんを尊敬されておりました。田村さんをご存知の方はよく分かると思うんですけれども、人の能力評価については非常に厳しいといえますか、正確に評価されていた方なんですけれども、田村さんが尊敬されていたプランナーというのは、一人はこの方役人なんですけれども、国土庁の事務次官やられた下河辺淳さん、それからもう一人は浅田さんで、この二人、特に浅田さんを非常に尊敬されていた。そういう田村さんの浅田さんに対する尊敬というのは終生変わらなかったような感じがしております。田村さんと浅田さんの交

流の内容について最初に書いてあるんですけども、一応私の感じでは3つのステージに分かれて見られるのではないかと考えております。最初は丹下研に田村さんが入られて、卒論を書くというときに、浅田さんが特別研究生、今でいうと大学院ということだと思うんですけど。これはもうキャリアコースになっているポジションにおられて、田村さんの卒論に関して、相談に乗っています。そこから始まって環境開発センターに入るまでが、最初のステージだろうと思います。で、このあたりについては田村さん自身の本の中でも、結構詳しくこの出会いから入社までのことは書かれていますから、まあ皆さんご存じじゃないかと思えます。それが最初のステージで、その次は環境開発センターの中で浅田さんと田村さんがコンビになって地域計画に関するいろいろなプロジェクト策定とか、そういう活動をされた時代。この時点では浅田さんが環境開発センターの代表ですから、そういう意味では浅田さんがいて、その下に田村さんがいたと、そういう関係に形としてはなるのかと思えます。それから3番目のステージは市役所入庁後ということで、いずれも田村さんの方から見た立場で書いてますけれども、田村さんが市役所に入られた後の浅田さんとの付き合い。これは先ほど田口さんの年表の説明の中でもありましたけれども、4人委員会がつけられた。今度は田村さんがそういう委員会をつくる立場になって、枠組みをつかって、そこに浅田さん、八十島さん、高山さんなんかに入っていて、色々知恵を出してもらったり、議論してもらった形で、市役所入庁後は、土俵は田村さんの方がつくって、そこで色々知恵を出してもらった。そんな形になったのではないかと思います。以上分けてみるとそういう3つくらいの区分ステージになるのではないかなという感じがしております。それで、浅田さん、田村さんそれぞれ非常に優秀で素晴らしい方だったわけですけども、例えば特色を3つ上げろと言われたら、なんと答えるだろうと思って、それをこの「それぞれの個性」というところに書いたわけです。浅田さんについて3つ、田村さんについて3つ挙げております。浅田さんに関して言いますと、まず非常に特徴的だったのは、時代の最先端の課題に対して強烈な関心を持っていた。今日本の社会で何が問題かというようなことだけではなくて、日本ではまだ問題となっていなかったような、福祉の問題なんかアメリカで今こういう福祉の問題があるんだ、ということまで含めて非常によく勉強されていた。そういうことに対してどうするかというような、そういう時代の最先端に対する強烈な関心を持っていた方だった、というふうに言えるんじゃないかと思えます。それから次は発想の仕方がデザイン的、これは建築にしろ、社会にしろ、組織にしろ、それから政治の問題にしろ、色々な場面で発想の仕方がすべてデザイン的な発想の仕方をしていて、ということが一つだったんじゃないかと。それと裏腹になると思うんですけども、3番目に思いついているのは、要するにトータルのイメージとディテールがある。浅田さんはディテールにもものすごく詳しい方でした。後ほど氏家さんに設計の話でもしてもらおうと分かるかと思うんですけども、鉄骨のディテールのおさまりとか、そういうことについて本当にどこでどう勉強したんだろうというくらいに詳しく。それからデザイン的な発想をしますから、トータルデザインというように非常にユニークな発

想をされる方だった。ただ、そのトータルなイメージと、ディテールがあるけれども、そのつながりが薄いといいますか、要するに二つあって間がどうもつながらないようなところがある。で、このデザイン的な発想とか、トータルとディテールというような話は、田村さんもそういうことをおっしゃっていて、川添さんもおっしゃっている。だいたいみなさん共通してそういうことを感じられたと思います。いずれにせよ、非常に個性的で優秀な方だったんだ、と思います。それが浅田さんに対する 3 つ特性を言えと言われたら、私はこんなことじゃないかと思っております。

それから田村さんについてですけれども、最初に挙げましたのは信念を実現するという情熱がすごかったと思います。色々な場面で、特に横浜市の 6 大事業を推進するうえで、出てきたんじゃないかと思います。皆様よくご存じだと思うんですけれども、目標設定して、それを信念を持って実現しようとしていた。田村さんは無教会派のクリスチャンだったと思うんですけれども、やっぱりそのクリスチャンだった田村さんの個性がこういうふうにつながっているんだと私は思うんです。それが一番最初に思い浮かぶことです。それから次は全体像の把握と体系化というふうに書いてありますけれども、これは何を考えるにしても、何を言うにしても、非常に整理されていたという印象はあります。私が環境開発センターに入ってすぐの頃ですから、田村さんと会ってまだ間もないころですけれども、こういうことがあったんです。田村さんと話して、問題の捉え方について、一番右側はどこだという話なんですね。一番右側はここまでで、ここから先はない。それから一番左はどこまでだというと、ここでここから左は無いんだと、というような話にまずなります。そうすると、この右とこの左の間が全体になるわけですね。で、ここから先は無いですから、他に何かあったとか、そういう話は絶対起こらないわけです。そういうことで全体を確定して、それを今度は中を割っていく時に、まあどんな割り方でもいいんですけれども、赤か黒かでもいいし、三角か四角かでも、何でもいいんですけれども、とにかく全体を割っていく、いくつあってももちろん構わないですけれども。それで割ったところで、例えばこちら側を A だとすると、A と残りは全体から A を引いたものになると。そういう割り方をするわけです。で、これは 3 つに割ってももちろん構わないですけれども。割っていったときにそういう風にして捉えていくと、絶対その分割したものを足し合わせると全体に一致するわけですね。で、重複もしないし、足りなくなることも絶対に無い。そういう話の進め方に初めて私は出会ったんです。それで、私はそれが印象に残っているというか、びっくりしました。これは法学部の論理なんだな、と私は思ったんですけれども、まあそうかどうかは別にして、そういう論理の進め方をするということで全体像の把握と体系化というのが、これが揺るがないんです。これが揺るがないということがやっぱり田村さんが役所の中に入られて、潰れないで色々な仕事をされていたというのはやっぱりそういうところがあったんじゃないかということで、私は非常に印象に残っています。それから 3 点目、事業推進の組織戦略というふうに書いてますけれども、これは戦略の立て方が非常に上手かった。上手かったというのは結局、ここで言っていることを大まかにわけると浅

田さんはデザイナータイプで田村さんがプランナータイプだったということになるのかも
しれません。現実的な状況色々に見渡して、そこの中でどうするかという選択なり、
判断が田村さんは実に上手かったんだと思います。前回この研究会で内藤さんが話をさ
れたと思うんですけども、この話は内藤さんから聞いた話なんですけれど、港北ニュー
タウンに関連してです。ちょうど内藤さんが住居容積の話をしたのと同じ頃の話で、内
藤さんが係長になったぐらいだったと思うんですけども、港北ニュータウンで地元の方
たちをまとめて、まちづくり協議会を設立されたんですね。要するにまだ事業が確定する
前の話ですけども。その時に田村さんがその協議会に出かけて行って、色々会議をされ
たわけですけども、その時に例えば地主さんたちでも、関心を持っている内容が色々違
うわけですね、賛成の方もいれば当然反対の方もいる中間の方もいる。そういう色々な状
況を田村さんは、実に見事に整理して、物事が進むような形に整えたいらしいです。それを
内藤さんが非常に感激して印象に残ったらしくて、ある日雑談でそういう話を私にしてく
れたことがあるんです。そういう組織戦略をここで考えております。

今、田村さんについて私の印象 3 つあげようということで、最初は信念を実現する情熱と
いう、これは無教会派のクリスチャンだったということが背景になってということだった
んだろうと考えています。それから全体像の把握と体系化というのをここに書いたのは、
まさに法学部的な論理の作り方について見事な分析力を持っておられて、ああいうやり方
であつたら、絶対全体が崩れることも無いし、部分~~を~~足し合わせると絶対に全体と一致す
るといような形にできるんだと、そういうやり方を非常に明快に示されていたんではな
いかということで申し上げました。3 番目の事業推進の組織戦略につきましては、港北ニュー
タウンのまちづくり協議会を設立するとき、非常に組織のまとめ方が、抜群だったと
いう話を内藤さんがされていたと。私自身が記憶してますのは、横浜スタジアムをつくる
ときの話を記憶しておりますけれども、あそこは都市公園ですから、都市公園の中に施設
をつくと建蔽率の制限があるわけですよ、5%だったか 3%だったか、正確に覚えていな
いんですけども、建蔽率を超えるわけにいかないんでどうするか、っていう話があった時
に、建設省と相当掛け合っていた。その当時建蔽率というのは、水平投影面積で算定する
ということだったそうなんです。スタジアムっていうのは、要するに上に広がるような形
になっていますから、水平投影面積の一番広いところから下ろしたところで面積になって、
それで建蔽率をカウントすることになると、それだと違反することになったんだそうです。
スタジアム建設の時に色々議論して、結局落としどころになったのは、地べたにつく接地
面の面積で建蔽率を計算するというふうに協議して、そういうふうになったんだという話
を聞いたことがあった。例えばそういう話とか、スタジアムの経営計画を立てるときに、
実は既存球団が入ってくるとか、そういう話があった時期のようです。年間の経営を安定
するために座席を、年間貸切制とかで企業に買ってもらい、それで安定財源をつくり、そ
れで経営を回していくようにするんだとか、そういう知恵をずいぶん出されたようです。
そういう話を聞いているとやっぱり事業推進の組織戦略について、まさに抜群の才能を持

っておられたんじゃないかなという感じが私はしております。そんなところが田村さんの非常にユニークな点だというふうに私は思っているわけです。

●浅田孝 創設の理念

次に環境開発センターの創設の理念ですけれども、これは浅田さんがつくられたわけですから、浅田さんが創設の色々なことを考えておられるわけです。先ほど経歴のご説明があった中で、世界デザイン会議というのがありました。1960年日本の建築とか、グラフィックデザイン、インダストリアルデザイン、いろいろなデザインに関わる分野の人たちにとって画期的なことだったのです。デザイン会議が終わって、その前は南極観測隊昭和基地の設計がありますけれども、そういうものが終わって、やっぱり環境開発センターみたいなものをつくらなくちゃならないんじゃないか、ということに達した。要するにそれまでの浅田さんの活動成果を集約するようなかたちで実践として、株式会社環境開発センターができています。で、その内容については「強力なプランニングボードの創設を提唱する」という1961年の8月ですから、会社ができて4ヵ月後になりますけれども、そこで浅田さんが書いた短いパンフレット、当時のガリ版タイプですか、こんなのが残ってます。6ページくらいですね。ここに浅田さんが環境開発センターをつくったエッセンスが全部ここに出ているんだと思うんです。私のメモには目次だけ入れているんですけども、「初めに」というところに出ているのが、アメリカのMITのカリキュラムの話が出ています。これは今まで、たとえば建築とか土木とか、化学とかそういうかたちで学科がずっと色々できてきたんだけど、どうも科学技術の発達によって、そういう区分の仕方はあんまり意味がなくなっているんじゃないか、ということで、MITをどういうふうにするか、フォード財団の基金で検討している。その結果4つの分野にまとめたかどうかという提言になっているということで、一つはエネルギー変換、それからもう一つは情報伝達、それから3番目が物質処理、4番目が環境研究。まあこんなかたちでつくったらいんじゃないかというような提言がある。要するにここから出てくるのは色々な総合性を必要としているというような話になってくるんだと思うんですけれども、そういうことでこの文章が始まっているわけです。まあざっと言いますと、「現代は総合を要求している」という世界デザイン会議の宣言によって、要するに世界は総合化を求めているというようなことが書いてあります。それから「地域計画のあるべき姿」としては、この当時はコンサルタントとかそういうのはまだあまりないわけですから、実際、どういうかたちで地域計画を作っていたかっていうと、役所の方がちょっと夜、図面書くとか、あるいは大学の研究室なんか少しはあったかもしれないけれども、要するにちゃんとした形になっていない。外国では専門家がいて、専門家がちゃんとそういうものを受託して、きちんとした計画を責任もってつくっている。日本はそういうふうになっていないから、やっぱり専門家が活躍できるようにしなければいけないという例としてたとえば、TVA、Tennessee Valley Authority 開発計画がある。それからギリシャのドキシアデスという、プ

ランナーがアテネで計画事務所をつくってアテネ工科大学をつくって、国連の低開発地域の開発計画をつくるとかやっているのに、その体制が日本ではできていない。そういう本来の地域計画をつくるような体制をつくるべきだということがその節に書かれています。「プランニングボードはなぜ必要か」ということではそういう地域計画とか施設計画は戦略であるということです。要するにその当時は例えば、工場なんかをつくるにしても企業が自分のところの工場用地だけをつくるようなかたちになっている。それを戦術とっていったんだと思いますけれども、戦術だけあって、それに対してアクセスする道路とか、工業用水とか、電力とかまあ色々な外部の環境の整備というのが必要なんです。そういうものがなおざりになっていると、要するにそれは総合性が欠けているという話にもなりますので、そういうことで戦略が必要だと。それをちゃんとしないと、その時に例に出ているのはドイツのアウトバーンですね。ドイツはああいうインフラが整備されている。そういうところと日本は本当に太刀打ちできるのかどうか。そういうことで戦略を考えなくてはいけないのではないかと。ということで日本の現状は強力な計画の体制を必要としているということで、これが環境開発センターをつくった所信になっているんだと思います。会社を作るというのは、今の時点ですと、イージーな感じがしますが、浅田さんはその会社をつくるということが、よくある金儲けの手段の組織だというようなイメージが全くなくて、きちんと責任を持てる体制の組織にするんだということが非常に強かったようであります。そのあたりが浅田さんが環境開発センターをつくった思想だったということですね。

●田村明 プランニングボードの活動イメージ

それがあってつくられて、そのあと二年くらい経ってから田村明さんが入社されたんです。入社される前に香川県の観光計画とか、環境開発センターの仕事を手伝っておられた時期があって、それから正式に入社された。昭和37年8月、入社される半年くらい前ですか、これも先ほど田口さんから紹介ありました「地域計画機関のあり方について」というのを田村さんが書かれています。田村さんはガリバーの日本生命から、社員が何人もいない会社に飛び込んで来られたわけですから、相当覚悟もしていただろうし、やっぱり浅田さんの創設の理念に共鳴して来たんだろうと思います。そういうふうな状況で入られて、じゃあ自分としてはどういう地域計画機関をつくったらいいか、ということで、やっぱりこれも短い文章ですけれども、これですね。これも8ページぐらいで述べられているんですけども、これも目次だけ書いてあります。「現状において如何なる欠陥があるか」、要するに計画が計画になってないとか、総合性が無いとか、それからヴィジュアルな計画までちゃんとつくらないといけないとか、当時の問題点が指摘されている。それに対して「これから如何なる仕事をすべきか」「如何なる仕事であるべきか」、これはまさに浅田さんの創設の理念を受けた形で、やっぱり総合的な計画をつくらなくてははいけない。ということで非常に総合性を強調してこれは書かれております。まあそのあたりまでは、田村さんの

書かれた本をご覧になるとよく分かると思うんです。私はやっぱりこの環境開発センターと関連付けて、関心があったのは、この中の一番最後のですね「如何なる組織、人員が必要か」というところなんです。結局どれくらいの組織体制にするかというイメージまで、浅田さんはそこまでは言わない人なんです。田村さんはそこまできちんと言う。最後にそれを言われてるんですけども、結局プランナーも総合プランナーと専門プランナーと二つに分けて考えられていて、それで専門プランナーというのは、例えば建築、土木、設備、調査、法制—法律ですね、こんなものを挙げている。総合プランナーが 5 人で、専門プランナーが 25 人、で 30 人ぐらい。すると総合プランナーが 5 人いますから、チームが 5 つできるわけですね。要するに 5 つのチームで仕事をやっていくぐらいのつもりで地域計画機関を作ったらいいんじゃないかと。そんなことを考えられていたようです。たぶんそのあたりが当面の田村さんの組織イメージだったんだらうと。そんなことで「浅田・田村と環境開発センター」のところは終わりにしまして、次は環境開発センターで総合性とプロジェクト主義に関連して、どういうことをやろうとしたか、やっていたかということについて具体的な計画に関連して申し上げたいと思います。

2. (株)環境開発センターが目指した活動～総合性とプロジェクト主義に関連して～

●戦略的な体制

まず先ほどの浅田さんの創設の理念からも分かるように、環境開発センターについては戦略的な体制をつくるという意図がかなり最初からあったんだと思います。そうすると環境開発センターの内部では、ここで挙げてありますように内部組織として、社長の浅田さんがいて、秘書がいて、それから計画部と設計部があって、計画部の方の部長に田村さんがいらした。私はその下にいた。それから設計部があって、こちらはたぶん浅田さんが兼任ということだったんだらうと思いますけれども、氏家さんがこちらにいらして、あと事務の人がいたと。こんな形の内部組織になっていました。結局こういう組織でやろうとしていたのは、自分のところで仕事を受けてやるというよりも、むしろ戦略的なヘッドクォーター部門といいますか、色々なものを総合化する部分を環境開発センターの中でやるんだと。先ほどの田村さんの提言の中であったような総合プランナーというようなところを中心として、やろうとしたんじゃないかと。それと併せて外部との連携といいますか、特に浅田さんは非常に顔が広い方で、いろいろなところに色々な人を知っていて、ということで今でいったら株式会社で、そんなこと、というぐらいの色々なトップレベルの専門家とか立場の人たちと一緒に仕事をするという体制をこの時はつくっていたんです。そういった建築家・プランナー事務所とのネットワークとか、あるいは委員会方式とか、こういう色々なかたちを使いながら、そういう外部との連携によって、環境開発センターが総合的なヘッドクォーター部門となる。そういうことで新しい社会をつくっていくような仕組みをできないかという、そういうかたちで進めていったということだと思えます。当時と

しては非常にユニークなイメージだったんじゃないかと思います。

●明確なトータルイメージ

それから次のページに行きます。環境開発センターで提案したことで、私は非常に大事なことじゃないかと思っているものですから、ここに挙げたんですけれども、浅田さんが非常にデザイン的なイメージのクリアな方だったものですから、提案する内容が非常に明確なトータルイメージを持っていたんだと思うんです。その当時はまだ市民運動とかあまり無かった時代なんです**が**、今になってみてもやっぱりこういう非常に明確なイメージを提案するということは計画を市民化させるうえで非常に重要な要素になるんじゃないかと私は思いますから、そういう意味では非常に効果があったんじゃないかと。ユニークな活動だったんじゃないかと思うんです。その内容は二つ挙げてますけれども、一つは地域の**将来**像を明確に打ち出した。それは例えば横浜の**6** 大事業なん**か**も、はっきりそうで。それからここで挙げてますのは、鹿島工業地帯のゴールドトライアングルということで挙げておりますけれども、これは鹿島臨海工業地帯の整備計画を受託したことが当時あったんですけれども、鹿島の掘り込み港湾と併せてコンビナートをつくるという計画を進める。その計画を作っているんですけれども、それを飛び越した地域イメージを提案している。鹿島**臨海**工業地帯とそれから水戸の東海村の原子力施設地区一帯と、それから筑波の研究学園都市と、この3つでゴールドトライアングルをつくって、1つの地域だけじゃなくて、3つ連携して1つの知的なとか高度な機能集団を、地帯をつくっていく。それを成田空港と結び合わせることによって、成田から世界と提携できるようなそういう形の構造をつくったらいんじゃないかと。それは受託した計画とはかなり離れたもっと上位のイメージなんですけれども、そういうイメージを提出するというのが、非常に地域像を明確にしたんじゃないかと。そういう明確なイメージを出したというのと、もう一つはそれを**ビ**ジュアルに表現した。このビジュアルに表現する、実際にデザインしてくれたのは栗津潔さんが一番多かった。**5**年**ほ**ど前亡くなりましたけれども。これも横浜の場合に工業と住宅と、港湾があって、この上に国際**文化**管理都市ということで、横浜市の将来像をグラフィックなイメージにしている。それから**6** 大事業も玉が**6** つあって、こうやって結んで行って相互に関連しているんだということを、要するにそういうことをビジュアルに見せたということが非常にやっぱり大きい意味があったんじゃないかと思います。これは横浜だけじゃなくて、東京都の構想でもそうでしたし、それから香川県でも五色台のマークなんかは非常にそのマーク自体が訴える力があったんじゃないかと。そういう意味では非常に明確なイメージを出していたということが一つの特徴だったんじゃないかという感じがしております。

●総合的な視点

次は、総合的な視点ということで、二つほど挙げておりますけれども、一つは「近畿万

国博覧会構想に関する研究報告」、1965年の3月。これは大阪府が万博を招致しようとして、パリに国際本部が確かあるんですけども、そこで万博を開いてもいいというお墨付きができて、日本の開催が決まる。そのパリの本部に提出する資料をつくるという調査の委託だったんですね。発注者は大阪府なんですけれども、その中で、これは発注者が何を頼んだかということとも関連するんで、すべてが環境開発センターの方のオリジナルかどうかという点は、まあちょっと検討する余地があるかと思うんですけども、少なくとも私やっぱりユニークだと思っているのは、万国博が開かれると来場者が当然沢山になるわけですから、そういうかたちに対して近畿、要するに関西の地域全体のレベルアップといえますか、活性化というか、そういうことを図る必要があるんじゃないかと。そのために地域開発あるいは主要観光拠点の整備を進めていくということが必要だろうということ、例えば奈良とか京都とか、瀬戸内海とか紀伊半島とか、色々なところの地域開発、地域整備をやっていく必要があるという提言をしているわけです。それからもう一つ、これはまだその万博を開くということが決まってもいない時点の話なんですけれども、既に会場の跡地利用をどうするかということをご提言している。近畿圏における学術文化センターということで、近畿圏の地域構造がどうかと。要するに北の方に都市が発展していくというような状況だったようなんですけども、そうするとこの万博の会場がどういう位置づけになるかを検討したうえで、跡地利用どうするかという提言をされている。少なくとも大阪府がまだ決まってもいない万博の跡地利用のことを頼むということとはたぶんありえないと思うので、これは環境開発センターが提言したオリジナルの内容じゃないかという感じがしております。それから「堺・泉北臨海工業地帯環境整備に関する基本調査・研究」、これも大阪府の企業局なんですけれども、大阪府の東側ということになると思いますが、堺市とかそれから高石町(注：1966年に市制施行、高石市となる)とかあのあたり一帯ですけども、大体2000ヘクタールだと思うんです。ちょうどもう造成工事が進んでいる途中の段階で、こういう調査を受けてるんですけども、委託の項目が、環境開発から言うと受託の項目が、環境整備に関する11項目ということになっていました。その11項目というのが例えば、交差点計画をどうするかとか、それから公共用地の余っているところをどう利用するかとか、それから緑地帯、標識、まあそんなものを11項目検討するということになっていたんです。この堺・泉北については、田村さんが全体をプロデュースして自分でまとめられております。近畿万博は浅田さんのイメージがかなり強かったような記憶がありますけれども、堺・泉北の方はこういう調査報告書をまとめるにあたって、発注者の11項目についてはもちろん全部答えてるんですけども、その前に総論が入っているんです。ここの総論の部分がやっぱり田村さんの総合性に関する内容だと思うんですけども、堺・泉北工業地帯は周辺地域との関係が非常に強いんだというようなことをまず言ってるんですね。それは交通問題もありますし、色々な供給処理の問題なんかもありますし、物流の話もあるし、色々あるんですけども、要するに我々はこの11項目に対して答えてるんだけど、全体としてはそういう大きな問題があると。それからもう一つは環境

整備の 11 項目というのはかなりこの、大阪府なり公共に関わるような部分についての調査なんですけれども、実際は個別の企業の用地の中の問題もあって、それも本当はちゃんと環境の問題を考えなくては行けないと。要するに一番最初私が言いましたような全体はどこかという話をされた。その中でこっちはこうで、こっちは企業の問題になって、その中間のここについて我々は答えてるんだけど、全体がありますよと。そういう話が総論として頭にあるということがやっぱりユニークだったんじゃないかと。それからもう一つは計画の策定の体制で、これは先ほどちょっと言いましたように、外部の色々な調査機関とか、そういうところをフルに活用されています。具体的に 2,3 上げますと、楨設計事務所が参加されてますし、それから黒川紀章さんもこの時入ってます。楨さんはこの調査が終わってから 11 項目の中の 1 つである臨海関連業務を入れるビルを設計して、臨海センターという名前だと思いますけれども、それが建って今も現在活動しております。そういう計画策定の体制のネットワークをつくって、それでこう進めていた。それがもう一つの特徴だろうと思います。それからもう一つ、これは私は現物を見てないんで、今回調べてみて分かった、非常に印象的だったんですけれども、付属資料としてこの二つを挙げてるんです。一つは「ニューヨーク港とその水際地域の運営」、それからもう一つは「Stanford Industrial Park について」、この二つが付属資料としてついております。これは 1965 年ですから、この当時にしてみれば非常に先端的な付属資料だったんじゃないかと私は思うんです。ニューヨーク港とこの資料につきましては、ポート・オーソリティのことがたぶん入っているんだと思うんです。私は資料そのものを見ていないんで何とも言えませんが、ポート・オーソリティっていうのはまさに総合性に関わる話で、都道府県で港湾を区切って、それぞれに自分で管理してるというそういうことに非合理性があるのです。そういうところが色々あって、堺・泉北においてもポート・オーソリティの実現を提言しています。それから東京でもそれを取り上げてますし、横浜でも実は環境開発センターのレポートの中でポート・オーソリティのことは触れていたと思います。特にその当時、まあ今もそうかと思うんですけれども、ニューヨークのポート・オーソリティというのが空港とかトンネルとか、そういうことまで含めて、今も 9.11 の跡地の利用の話なんかで出てきますけれども、そういう広域的な管理運営体制の合理化ということについてこれは特に浅田さんが非常に關心持っていたようですけれども、ずっと主張している中の一部だろうと思うんです。そういう点で時代的な意義があったんじゃないかと思えます。それから Stanford Industrial Park については、これはたぶんできた直後ぐらいだったと思うんですけれども、Industrial Park として紹介している。実際は要するに環境が整備された工業団地をつくる、という話なんですけれども、シリコンバレーの一番最初がこれですよ。Stanford Industrial Park をつくって、これが周辺地域に滲み出して行って、シリコンバレーになったんだと。そこまで予見してたかどうかは分かりませんが、そういう意味では非常に時代的な意義があるんだと思うんです。

●動的アプローチ

次は「動的なアプローチ」、浅田さんなり環境開発センターについてはプロジェクト主義という言い方もされてますけれども、私はやっぱりプロジェクト主義ではなくて、動的なアプローチだったんじゃないかというふうに思っているものですから、こういうふうに書いています。要するにプロジェクトというのがア priori にあったわけじゃなくて、その地域の課題を解決していこうとすると、プロジェクトが出てきたり、あるいは動的なアプローチになったりということになるんじゃないかと思ってこういうふうにした訳です。鹿島工業都市圏の環境整備計画報告書、広域的なイメージについて先ほどちょっとゴールドトライアングルのところで申し上げましたけれども、この報告書の一番最初のところに、地域開発計画の問題点ということで、こういうことが書かれています。今の工業開発というのは、生産面への偏りが強いと。それはやっぱりまずいんじゃないかと言っているわけですね。具体的な開発計画の不足ということで、これは経済計画とか社会計画とか、そういうのがあって、それを具体的にどうフィジカルなところに落とし込んでいくかという開発計画が非常に不足している。そういう物的な計画につながる段階を特に重視しておく必要があるんじゃないかというふうにしてあります。それから総合的な計画がまだ未熟である。計画のギャップ、これはそれぞれの機関がそれぞれに計画をつくっているんだけど、それが整合性がなくて、コントロールする機関が無い。そんな問題があるんじゃないかと。そういうことで計画の脆弱性、要するに具体的な状況変化をリードするようなプログラムが必要になってくる。ということで、こういう地域開発をする必要があると、一番最初にこれを書かれているんです。そのあたりが総合性であり、動的なアプローチとして、こういうことを考える必要があるんだという提言だったんだと思います。

●新しい時代の予見

それから次は、これは受託業務じゃないんですけれども、やっぱり環境開発センターといますか、浅田さんの思想についてちょっとここで聞いていただきたいと思って挙げたんですけれども、新しい時代の予見をしていた。当時から見て今でも十分通用するようなことをちゃんと言われてるんです。今われわれが考えて、50年先に通用するようなことを言えるかという、私なんかとてもじゃないけれども、考えることもできないんですけれども、そういうことをその当時に言ってたんだということをちょっと聞いていただきたいと思ってこれ書いたんです。子どもに対する、要するに、子どもをただ遊ばせるとか、そういうことではなくて、こどもの国の設計プロデュースなんかされてるんです。これは最初は新宿の戸山ヶ原のところに候補が決まりそうな状況だったんだそうですけれども、やっぱりあんところではなくて、もっと子どもを自然の中で遊ばせる必要があるだろうということで、色々土地を探して、その時に今の横浜の場所を探されたんです。そこは当時米軍がつかっている**接收地**だった。それを具体的に誰がどう動いたか分かりませんが、朝日新聞社の人、笠信太郎さんが非常にバックアップしてくれたと浅田さん書いて

ますけれども、私がちょっと聞いた話では、国際文化会館の松本重治さんという館長さんが非常に日米関係の日本側の重要なパイプになった人だと思うんですけども、その方がラスク国務長官に親書を送ってくれて、それで米軍が現に使っている**接收地**をとにかく空けてもらって今の場所に決まった。100ヘクタールですかね。そういうプロセスまで浅田さんはどうも嘖んでるみたいなんです。そういうことをやったうえで、こどもの国のマスタープランをつくった。そんな子どもに対する設計思想まで含めて非常に配慮されていたんだと思うんです。それから福祉についても一番最初申し上げましたけれども、要するにただ福祉をやればいいのかということではない。色々な障害をもっている人の生きがいをどう実現していくべきかということについて、この当時非常に優れた文章を書かれています。それから市民参加についても、これもただ参加するとかいうことではなくて、人間性の回復といいますか、解放といいますか、そういうことの一つの形として市民参加はあるんだということをおっしゃっているんです。それぞれにそういう文章が残っていて、単に福祉・住民参加じゃないんだというようなことをちゃんと書かれていることで感銘を受けるような文章になっています。次は住居表示なんですけれども、これは当時の自治省に住居表示**制度**審議会があって、**地番整理**をするための法律をつくってそれを実施する**ための議会**があった。そこに浅田さんは委員として入ったんですけども、非常にその問題、住居表示の問題について熱心だったんですね。後になって私なんか気がついたんですけども、住居表示の問題というのは、ミクロなまちづくりの話そのものなんですね。だから浅田さんの関心は住居表示そのものというよりも、そういう地区レベルの問題をどう考えていくかということ非常に熱心だったんじゃないかという感じがします。それはまさに地区計画を包含する話だったんじゃないかという感じがしております。それから総合性の担保、これは総合性を担保するものは三公の原則だということではあるんですけども、公平性、公共性、公開性。これをきちんとすることによって総合性が担保されるんだと。というようなことをおっしゃっていて、まあこんなところが私はやっぱり、非常に先が見えていたんだなというような感じがしております。

3. 横浜のまちづくり構想の誕生

●横浜の将来計画に関する基礎調査報告書(昭和39年12月5日)

最後に「横浜の街づくり構想の誕生」ということで、ちょっと話させていただきますけれども、先ほどもご紹介ありましたように、6大事業の元になった、環境開発センターの報告書が「横浜市将来計画に関する基礎調査報告書」というもので、これはこの中で6大事業、この当時は7つだったわけですけども、後に横浜市が6大事業ということで整理された、それが入っている報告書です。これについて、これも報告書そのものは田村さんがほとんど作られたと思うんですけども、浅田さんもかなり色々議論はしていると思います。SDという雑誌がありましたけれども、**浅田さんが**そのインタビューに答えているんですけども、結局6大事業というのは「明治以後100年の国民のストックは貧困で

あり、六大事業は自治体のストック形成、戦略的プランニングの問題」であると。要するにここで言っていたのはストックが貧困だと、どうも人間が落ち着いて生活できないような、状況が出てくるんじゃないかと。普通の市民生活を安定させるために、ストックをつくっておくというのは非常に重要なことで、そのストックを今まで明治 100 年つくってこなかったと。それをどうやって作っていくかということが、極めて重要で、そのために 6 大事業という形で戦略的に作ったらどうですかという提案だったんだと思います。

次は「法定都市計画は、都市の骨格づくりを総合的に実現するものではない。」これはプロジェクト方式とか色々やっていることの背景として、法定都市計画では街は動かない、そういうことをここで言っているわけです。「六大事業は、長期に亘る地域社会の骨格的なストックを総合的に形成する基幹的的事业」なんだ、ということです。

それからもう一つ、これは違う側面になるかと思うんですけども、この当時ジェネレイティング・システム、生成システムということ shallow さんはしきりに言っていたんです。私は、新全国総合開発計画、新全総と言われたもののなかで、はじめて生成システムという言葉を知ったものですから、下河辺さんが考えた概念かなと思ってはいたんですけど、shallow さんが新全総の計画策定の時に委員か何かで入っていて、使われたのかなという感じが今はしております。これはどういうことかという説明があるんですけども、「いくつかのサブシステムをうまく構成して、内挿しておく、それがやがて全体のシステムに影響を及ぼす自立性をだんだん持って来る」要するに横浜の 6 大事業を線でこう結んでいるダイアグラムがありますけれども、あれは事業相互にどうやって影響を及ぼして、それがどういう展開を招くかというようなことを実は中に含ませてあるようなシステム図だったんだということだろうと思います。そういうかたちでこの報告書が横浜市に提出されたんですけども、それが 12 月 5 日で、これの前から何回か、横浜市との打ち合わせ会議があって、たぶん飛鳥田市長も出ていらした会議でも、途中で調整がかなり進んでいたんだと思います。それをまとめたものが 12 月で、翌年昭和 40 年の 2 月に市長が「都市づくりの将来計画の構想」として、この六大事業の内容を議会で公表しています。

● 「横浜の都市づくり～市民がつくる横浜の未来」(昭和 40 年 10 月 1 日)

「横浜の都市づくり～市民がつくる横浜の未来」はその年の 10 月に出ているんですけども、私はやっぱりこれは非常にこの当時、ユニークだし意味のあるものだったんだと、思うのです。要するに市民に向けて、こういう計画をつくっていくということを、できるだけ分かりやすく説明した非常に魅力的な挿絵があり、これも栗津さんがデザインされて、クリアなイメージがいたるところに入っている。そういうものをつくった。ここまで出来てやっぱり 6 大事業といいますか、横浜市のまちづくりが軌道にのっていくということになったんじゃないかという感じがしております。

● 田村明 人的資産・構想策定プロセスのすべてを携えて横浜市へ

そういう経過があって、田村さんが横浜に行かれたわけなんです。横浜市はその当時は色々な方が外部から入られた。例えば廣瀬良一さんとか、それから内藤惇之さんもそういう感じですけども、あと岩崎駿介さんとか、そういう色々な素晴らしい方が入られた。もちろん田村さんもそうなんですけれども、他の方と違っていたのがこの二つじゃないかと私は思うんです。一つは環境開発センターで、浅田さんがメタボリズムの人たちといっぱい付き合っていて、田村さんもだんだん例えば、人工土地の問題とか、そういうのを通じて色々なユニークな人たち、外部の人たちとのネットワークはかなりできていた。それを持って横浜市に入ったっていうのと、それからもう一つはこの構想を作るときに浅田さんと相当議論していたはずなんですけれども、浅田さんはじめ、色々なスタッフの人とか、そういうこのヴィジョンをつくるまでのプロセスを全部理解して、ノウハウを持って横浜市に入った。結局こういう知識っていうのは人が持っていくものだと思うんですけども、そういうものを持って横浜市に入ったことがその後の横浜市の色々な事業の展開にずいぶん大きな影響を及ぼした。長くなったのかもしれませんが、以上で話題提供ということで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

(1:25:12)

田口：大変ありがとうございました。極めて興味深いお話ですね。先ほどご紹介しましたように横浜市大の鈴木伸治先生がお見えになっておりますので、田村明研究を長年おやりになっておりますので、そういう知見からご意見を頂戴したいと思っています。ではだいぶ衝撃的な色々なお話がありました。ちょっと頭を整理しながら、ご質問なりをお願いします。

田村千尋：どうも、先生ありがとうございました。実は今日、明の誕生日なんです。そういうことが記念でもあると同時に、ちょうど88歳になった日で、今日のお話伺っていて明が呻いている姿も想像できましたし、大変有意義な話をいただいたと思っています。ありがとうございます。

二宮：そうですか、誕生日だったんですか。

田村眞生子：奇しくもね、ちょうど今日が誕生日でした。

田口：私の方から確認の意味でなんですが、最初に環境開発センター作るときは3人の方は、この前お聞きしたんですが、出資をされたのは豊橋の方でしたか？

二宮：それは氏家さん、どうですか。

氏家：環境開発センターという株式会社を設立するときに出資者と発起人ですね。それがなぜか豊橋の3名でした。名前言いますと、井口さん、川合健二さん、川合健二さんをご存知の方は大勢いらっしゃると思う。それから、満田先生。豊橋の桜丘高校の理事長。満田、さんずいの「満」、田んぼの「田」。満田先生、理事長です。校長兼務ですが。その3人の方を発起人の一部で、一部ってというのは失礼ですけど、その判をもらいにいきました。浅田さんと一緒に私付いて行ったからよく覚えています。その時の浅田さんの移動はフォルックスワーゲンだった。森西栄一さんという元は丹下さんのドライバーやってた方が、浅田さんのドライバーに代わり、その方の運転で豊橋に行きました。3人を訪ねて行きましただんで、私よく覚えているんですが、その3人の方の判子を書類に押すところまで、私見てました。そういうことで豊橋の3人。あとは覚えてません。あ、あとはね、大高さんとか菊竹さんは、黒川さんは除いてますが、も出資者の一人です。それはあまり公表してないと思いますけれども。

田口：何で豊橋に？

氏家：それはね、川合健二さんという、アインシュタインみたいな方がいらっしゃってね、風貌からしてアインシュタイン。この方はね、リュックサック背負って丹下研に現れたんですよ。で、丹下さんが適当にあしらってたんだけど、浅田さんがこいつは面白い人物だと。ちょっと待て、って言って、色々話を聞いたら、いろいろな資料を取り出してですね、丹下さんが東京都庁舎設計し始めたころの話だったんじゃないかと今思いますが、こういう世の中に優れたボイラーがあるから、こういうのを使えということで、東京へいらっしゃった。豊橋から。それが川合健二さん。それからの付き合いだというふうに私は伺っています。

田口：すいません、カワイケンジさんの漢字は？

氏家：三本川の川合さん。アイは一合、二合の「合」。ケンはにんべんの、健康の「健」

田口：何をその方はやられていたんですか？

氏家：あのね、医者の子さんなんですよ。豊橋に川合医院というのが確かにありました。そこに浅田さんと一緒に行ったんですよ。その方がなぜか知らないけれど自宅にテレックスを、当時ですよ、昭和35年の頃、テレックスを置いて、豊橋みたいなあんな田舎と言っちゃ失礼だけど、もちろんちゃんとした街中。それで書類の山です。アメリカから取り寄せた、ボイラーの資料が世界中からあった。まあボイラー以外の資料もいっぱいあったんでしょけど。もう足の踏み場もないほど、地震が来たらどうするのと思うほど積み上げ

である。それを毎日虫眼鏡で読んでいる。虫眼鏡で見ると脳みそにみんな入ってくるっていう。

二宮：川合さんって人は独学で、そういうことを身につけた人なんですよね。だから普通のキャリアじゃないんですよね。スタンダード・アメリカか何かの極東組織…

氏家：アメリカン・スタンダードの日本の総代理店みたいなのを個人でやっていた。ですから香川県の五色台山の家を設計したときもアメリカン・スタンダードのボイラーを入れた。非常にコンパクトで鋳鉄がしっかりしたボイラーですから、それを押入れくらいの大きさの中に一個すっぽり入っちゃうんですね。それを各棟ごとに全部。どこか中央に機械室、ボイラー室設けるのではなくて、もっと小さいスペースで。そういう分散型がいいぞとアドバイスしてくれたのが川合さん。それで川合さんを浅田さんは非常に可愛がってた。言い方はおかしいですけども、川合さんの方が年上ですから、全く素晴らしい重要な人物であることを浅田さんが見抜いて、お付き合いをしていたんだろうと思います。

田口：分かりました。もう一点、すみません。芙蓉開発が資本参加されるじゃないですか。

氏家：芙蓉開発はその後ですね、その数年後です。最初から株式会社ではなく、数年後に株式会社にしたんじゃないかと思います。何ですが、芙蓉開発の仁谷さんという方が浅田さんに大変惚れ込みまして、出資して自分のビルに移転せんかと。住宅のマンションの一室じゃなくてね、という話があったんだろうと思うんです。その二人の会談の内容というのは私は知りませんが、それで急きょ銀座の新義産業ビル、古い焼け残ったビルです。銀座二丁目の。今はもうありませんけどね、エレベーターもちゃんとついてました。昔ながらの手挟みそうなあいう扉の、自分で運転するんですけど、そういうエレベーターのついた新義産業ビル、そこへ引っ越すことになりまして、そのビルの3階か5階かちょっと忘れちゃったけど、芙蓉開発という会社が入ってまして、その4階にオフィスがあったんですね。

田口：芙蓉開発さんはずっと、その後もずっとその関係を保ったんですか。

氏家：関係ないですね。出資はしたけれども、仕事は1つ2つもらったみたいですね。

田口：じゃあ一応会長職という名目上で、仁谷さんがおられた。

氏家：出資したのは確かです。環境開発センターに、増資するときに。そのときに芙蓉開発さんが出資されて、その時から会長になったんです。仁谷さんが。

田口：特に何か仕事上で深い関係があったということでもない。

氏家：芙蓉開発がつくったバキュームコンクリートっていう会社がありましてね、その同じビルの中にバキュームコンクリートが入っていた。工場は茨城県だったかな、に立派な工場がありました。バキュームっていうのは要するに、吸引する。真空状態に持って行って吸引するんですねコンクリートを、打設したときに。そういう特殊な工法、何かパテントらしい。非常に頑丈なコンクリートでそのコンクリートで矢板、地下掘るときに矢板を使うのですが、スチールで。その矢板にも使える。そういう会社もありました。仁谷さんがなぜ環境開発センターの大株主になったかは知っていましたが。特にそのために何か浅田さんが束縛されるとか、そういうことは一切ありません。全く無いです。そういうことは浅田さんは大嫌いなので。

田口：銀座から虎ノ門に移りますよね。あれは何年頃なんですか。

二宮：私が出た後ですから正確には分かりません。

田口：あれはもうだいぶ…

氏家：私も辞めた後ですから。私も二宮さんと同じ時期に辞めてますから。

田口：それで銀座から虎ノ門に移って、最後は白金のマンションでおやりになっていた？

二宮：そうですね。

氏家：ええそうです。浅田さんは最初はですね、私の頃は銀座の数寄屋橋の近くに柳月っていう「柳」の「月」の、木造の旅館がありまして、そこで生活していたんです。一人で。お家は逗子にちゃんとあるわけですけど。

田口：ご自宅は逗子にある？

氏家：そうそう逗子に、ちゃんとお家はあるんだけど、まあずっと一人生活、銀座で。銀座の旅館の住み込みだった。

田口：はい、分かりました。じゃあ皆さんの方から適宜…

氏家：浅田さんは1DKですかね、1ルームの畳の部屋があって、あとDK、ダイニングキッチンですね。LDKそういう部屋で環境開発センターを始めたわけです。千駄ヶ谷3丁目、渋谷区ですね。そこに田村さんがお入りになるとき、その時は銀座にすでに引っ越していて、浅田さんがそこに住んでいたんだけど、そこを渡して、そこに田村さんが一時お入りになったと思います。その時の印象はね、二宮さんがおっしゃったように、確かにガリバーの日本生命、とてつもない会社ですけど、田村さんに社員って何人ですかって聴いたら、君ね法律上社員っていうのは契約者だと。契約者が正式には社員っていうんだよなんて。色々田村さんから教えてもらいましたけれど、最初に教わったのはそれです。例えばね、ビルもいっぱい持っている、どういうビルがあるんですかって聞いたら、そうだな氏家君の知っているビルだと、日本橋に高島屋ってあるでしょう。あれも日本生命のビルだと。その翌週、わざわざ見に行くと、探したら、奥の方にですね、高島屋の正面向かって右側の一番奥の入り口側に「日本生命」ってちゃんと銘板が貼ってあるんですよ。へえと思って。私は高島屋のビルだとばかり思ってたから。所有者だったんですよ。そういうことを田村さんから一番最初に教わったんです。まあ私はあんまり色々なこと知らないんでね。驚いたりしてましたけれども。そういうことを教わりました。それでちょっと印象に残っている。話が長くなった。この辺ですみません。

田口：さあ、では皆さんの方で何か疑問やご質問なり、あれば。

??：じゃあちょっといいですか。質問というより感想みたいになっちゃうんですけども、今日お話聞いていて改めて感じるのが、日本にこういう人が他におられるのかと。ちょっと思ったのは、プランから関わって、実際に計画をやって、実践までやったという、一つの大きなまちづくりに対して、プランから実践までを一通りやったっていう人はいるんですか。特に僕なんかの時代からすると、大体プランはコンサル中心に、役所も入ってつくるんだけど、どちらかというと役所はあとは実戦部隊が出てくる。だから役所の中でも二つやる人はいないわけですよ。両方やるって人は。基本的には。田村さんは全部やられたという感じで、そういうタイプの人が今まで、日本に他にいたのかなと思ったんです。

二宮：結局、田村さんはそういうことをやりたいと思って日本生命を辞めて、環境開発センターに入られたんだと思うんですね。

??：ただ環境開発から横浜市に行くことで、全部やれる話になったわけですよね、なかなか無い例だろうと今お話聞いていて改めて思いました。そういう意味では幸せな方だったのかもかもしれませんね。

二宮：やっぱり恵まれたところはあった。そういうのを選ばれたんですからね。

??：まあ、そうですね。自分でね。

二宮：やっぱり、環境開発センターに入ったころの田村さんはかなり大変だったと思いますよ。(田村眞生子：大変だったようですね。)要するに都市計画の、極端に言うと、イロハも知らないわけですよ。36歳ですか、になって。それでこの笹原さんの本にもちょっと写真なんか出てますけども、若い早稲田の大学の学生さんがですね、トレペにマジックでこうやって赤とか緑とか、こう団子を回して、これゾーニングだって言っているのを、その言葉自体が最初分からなかったみたいです。それはそうですね、そういう世界に初めて入るんですから。ですから、相当その時期の田村さんは大変だったし、勉強もしたんだろうと思いますね。だから、それ乗り越えたんだと思いますね。

田村眞生子：そのころ本当に大変だったと言っておりました。(二宮：そうですね)全然それまで都市計画をやっていないわけですから、(二宮：そうなんですよ)ですから若い人たちがみんなそういうことをよく知っていて、色々なそういう新しい言葉を使いながら仕事やってらっしゃるのに、自分はそれを知らないから、それをまず勉強しなきゃというんで、家に帰ってから最終電車で夜中に12時ごろ、(二宮：いつもそうですね)横浜の家に帰ってくるんです。そこでやっと夕食を頂いて、それから二、三時間残っている仕事をやって、それからしばらく寝て、それで翌日まあお昼まではちょっと寝るんです。お昼のお食事をして、それで出かけていくという形なんですけれども、何か二時間くらいしか寝ない時代もあったのです。ともかくすごくその時は本当に一生懸命勉強したようでした。仕事とそれから都市計画の仕事に対する勉強、今までしていなかった勉強を若い人に負けないようにやらなきゃなんないというのがものすごく大変だったと。

二宮：それはそうだったと思いますよ。マジックでこう書くのが実は大した技術でも何でもなくて、大したことないのをやっているだけけれども、それが大したこと無いんだということが分かるまでがやっぱり、結構大変だった。いやいや、本当にそうだと思います。そこまでの壁が。

田村眞生子：計画だけじゃなくて実践も、とおっしゃいましたけど、何か自分で実践的プランナーというふうに言っておりますよね、ですから、プランと実践と両方やる人はあんまりいなかったということ、自分でも何かの時に言っておりますけれど、そういう意味ではちょっと日本では珍しい、変わった人間なのかもしれません。

二宮：やっぱりだから、道を開いたっていうか、本当にそれであとの人が付いていけるよ

うになっているかどうかという問題はあるんですけどもね。少なくともたぶん、あんまりいらっしやらないだろうと思いますよ。そういう方は。

田村眞生子：両方をね、わきまえている人というのは。まあ日本にはね、いらっしやらないかと。

渡邊：いいですか。この二宮さんの今日のレポートは、浅田孝と田村明を明快に分けているわけではないので、どちらに力点があるのか、ちょっと分からない点もありますけど。生前の先生のご講演で、都市デザインとか、アーバンデザインとかが、どういう意味かということが議論になったことがあってです。例えばその法制であるとかですね、横浜であれば色々な建築の規制であるとか、それから事業であるとか、そういうまさに総合的にね、都市をデザインするのが、都市デザインだと。その一つの見解が出てるんですけども、今のこのレポートを見てますとね、二宮さんのニュアンスの中に、例えば6大事業が、「長期に亘る地域社会の骨格的なストックを総合的に建設する基幹的な事業」という言い方があります。そしてそういうものを、そのちょっと上の方ですけども、「明確なトータルイメージ」「明快なビジュアルイメージ」として提示する。それが計画の市民化への重要な要素であると。というような書き方されてますよね。これは日本みたいな、日本を一般化していいのか分からないですけども、あまりくっきりとしたビジョン無しに、次から次へと成り行きでまちがつくられてたり、社会がつくられてたりするんですね。都市を形成する、都市をジェネレートする骨格を考える、そしてそれをビジュアライズする。それを市民に提示するっていうのが、稀有なことと思うんです。それでその部分は例えば田村さんから直接印象を受けたように、つまり法学部出身で建築学科出身でもある田村さんの総合性とはちょっと違いますね、これは浅田さんの、つまり何でもデザイン的に考えるという浅田さんの個性なのかなというふうに。僕は今このレポートをお聞きしててそういう印象を受けたんですけども、違ってますでしょうか。

二宮：いや、それはかなりの部分そうだったと思いますね。ただですね、こういう話が出てくるのは昭和40年代くらいですけども、ちょうど横浜市が人口が毎年10万人くらい増えてた時期ですよ。浅田さんがしきりに言っていたのは、文明の転換期だと言っていたんですよ。人口の国内の大移動が背景ですけども、それによってライフスタイルから何から色々と変わってくる。そういう時にどうするか、ということで、それが一番根元にあるもんです。それに対してこういうストック形成が必要だという話が出てきているんですね。ある意味ではデザイン的な部分もあると思うんですけども、やっぱりそうじゃなく、ある普遍性は持っていたんじゃないかという感じが私はするんですけども。

渡邊：しかも、それピリッとしたイメージとして、栗津さんがデザインしたのかもしれない

いけれども、それを構想してそれを絵にしてくれていったのは浅田さんの方だったんですよね。

二宮：そうですね。あの環境開発センターの報告書の方には、非常にプリミティブな形の絵はあるんですよね。それをうまくビジュアルしたのが栗津さんだったと思いますね。

田口：1961年がどんな時代だったかということで、ちょうど日本の都市計画コンサルタントに通じる建設コンサルタンツ協会が1961年4月につくられた。どちらかという土木寄りかなとは思いますが。その前の1957年には技術士法ができてます。やはり日本のそういうコンサルタント、都市地域計画をできるコンサルタントというのは、養成しなきゃだめなんだという動きがあった。パシフィックコンサルタントがそもそもできたのが、1951年。これはアメリカ法人としてつくって、それで1954年に日本法人もできてますよね、だから浅田さんがつくった環境開発センターというのはより都市計画、より地域計画寄りいわゆる土木系のコンサルタントとはちょっと違うのです。ちょっとこの動きも違うのかもしれないですけど、国全体としては、そういう地域計画、都市計画がらみのコンサルティングができる組織をつくるべきだという動きと上手く呼応するのかなというか、感じもしますけどね。

二宮：そうですね、あの技術士法というのは、分野で言うと23ぐらいあるんじゃないですかね、化学とか、電気とか機械とか、色々ありますね。要するに社会全体としてそういう専門家とかですね、コンサルティング機能とかそういうものが必要だっていう、そういう技術のニーズは相当あったんだと思うんですね。ただやっぱり浅田さんにしろ、田村さんにしろ考えていたのは、その時技術サービスをしようということではなくて、やっぱり技術サービスが色々あっても、それを社会の何ていいですかね、外部経済というか、どういう言い方をするのかわかりませんが、ようするに総合的な計画をつくるというのがメインのターゲットだっていうのが、ちょっと違っていると感じはします。

寺田：ちょっとつまらないことしか聞けないんですけど、鹿島のですよね、工業都市圏のところですね、田口さんのメモでは「生活環境整備調査」ってなっているんだけど、先生の方のメモでは「生活」って入っていないんですけども、これは無いんですかね。これどっちが正しいんでしょうか。

二宮：いや、これは単年度じゃなくてですね、二回受託しているということですよ。年次が一年ずれてますよね。田口さんのメモだとこれは、そうですね。

寺田：このころは大変に大きな騒動になる鹿島の、ということは、まだもっと前のそうい

うのが浮かび上がってくる前の前の時代のことですよ。

二宮：そうです。あの新産工特っていうのがありましたよね、あの時の工特ですよ。鹿島は工業整備特別地域ですね。

寺田：それともう一つなんです、先ほど二枚目のところで先生が、浅田孝さんがSDの中でジェネレイティング・システムという言葉を使っています。それが新全総からだったんじゃないかというお話でしたが、ちょうどSDの特集が出る前ぐらいに、ご存じのクリストファー・アレグザンダーが形の生成に関する論文を書いて、日本で一世を風靡した。だから、ちょうどSDの前にクリストファー・アレグザンダーのパターンラングージとか、このジェネレイティング・システムという言葉が一世を風靡するんですけども、僕はちょっと出所がはっきりしなくて、単純に考えていたんですけど、浅田先生はもっと前からこのジェネレイティング・システムという言葉を使っておられたんですか。このSDよりももっと昔からこの言葉を使っておられたんですか。

二宮：これのちょっと前だと思うんですけども、アレグザンダーの『都市はツリーではない』でしたか、あれの英文を持ってきて、お前これ読んでおけと言われた記憶があるんですよ。で、それよりもこれは前だったような気がするんですね。

寺田：そうですか。じゃあきつと一般ワードとして、アレックスが生み出した言葉じゃなくて、アメリカの都市計画とか、かなり昔からこの言葉は専門用語として理念とか、そういうものがあつたわけなんですね。きつとね。それをお読みになつていて。

二宮：そうですね、どうなんでしょうかね、そのあたりのことはちょっと分からないですけどもね。あの新全総の中に入っていたから、どうも下河辺さんじゃないかと私は思ったんですけども、そうじゃなかったみたいだという話なんですね。

寺田：あと、僕らはちょっと思い込みがあつて、田口さんのにもちょっと書いてあつたんですけど、総合性というのは、田村さんの、田村先生の専売特許だったというふうに僕らはすっかり思い込んでいたんですけども、今日のお話の中でね、やっぱり糸口は浅田孝先生にあるということが、これでああなるほどというふうに今日思いましたけれども。

二宮：浅田さんが言っている総合性とですね、それを田村さんは聞いているはずですけども、ちょっと田村さんの言っている総合性というのは、またもう一味違ったものがあるんじゃないかなという感じはしますね。

寺田：それはどういうふうですか。

二宮：いや、結局ですね、それぞれの個性の違いというのを端的に言うと浅田さんはデザイナー^的で、田村さんはプランナー^的だったんだと思うんですよね。そうするとデザイナーが及ばないような部分の総合性はあるんじゃないかと。それはここでいうと「事業推進の組織戦略」みたいなことについては、これは田村さんのいう総合性だったんだろうと思うんですよね。たぶん浅田さんはそういうところまでは、イメージとしてはもちろん言うでしょうけれども、実際のつなげ方とかそういうところまでは、及ばなかったのではないかなとそういう感じはするんです。同じ言葉でやっぱり含んでいるものがそれぞれだという感じがするんですけれども。

田口：非常に細かい話なんですけれども、浅田さんの蔵書が東北芸術工科大学の図書館の中で見れるんですが、えらく洋書が多いんですよね。浅田さんは語学には長けてたんですか。ちなみに田村さんはあまり語学には長けてなかったという感じがいたしますが。

二宮：浅田さんは非常に語学のセンスがあったと思います。喋るのも上手いし、アメリカの学者で親しい人が何人もいましたよね。デーヴィット・リースマン『孤独なる群衆』書いた人とかですね、それからニューヨークの都市計画協会で「大都市の解剖」とか何かそういうシリーズが4,5冊出た時期がありますけれど、1960年代。あの著者とかですね。そういう人と色々議論しているんですよね。議論していて彼らはどうだというようなことを、ちゃんと文章に書ける。すると、できたんだろうと思いますね。

田口：分かりました。

遠藤：すごい初歩的質問いいですか。横浜市で企画調整局を作り、ご自分の仕事を中心にやってらした。環境開発センターという組織が何かすごく似た組織というか、コンセプトがすごく似た感じがするんですけれども、外から見られてどんな感じされたんでしょうか。

二宮：あの、おっしゃる通りというか、それが私一番最後の行で言いたかったことなんですけれども、やっぱり田村さんがそういうところも横浜市に持って行ったんだと思うんですね。それで当時の企画調整局の方がここにいらっしゃるかどうかわかりませんが、最初は廊下をずっといった突き当りの部屋だったんです。あそこの真真中に大きなテーブルを置いて、そこでトレペを広げて、それこそマジックで団子を書いて、あれは環境開発センターでやっていたのと同じスタイルなんですね。それからファイル、キングファイルっていうのがありますね。あれに一件ずつファイルして、棚に入れた。あれもそうなんです。だからそういう環境開発センターの持っていたプラスの部分はちゃんと田村さんは継承し

て、それでそれを基にして、横浜市の市役所の中の組織を、要するに行政のユニークな組織として育てていったということじゃないかと思いますね。

田口：まあだから全部を統括するけど、自分では直接は事業を持たない、しかれども全体を統括する。コントロールして集合化していくという、プロデュースということですよ。

二宮：そうですね。6大事業の財政的な話は、あんまりどこでもでてきていないような気がしますけれども、あの当時飛鳥田さんのポリシーだったろうと思うんですけども、6大事業っていうのは横浜市のお金は使わないでやるんだということで実際色々なところのお金も出てますよね、そういうプロデュースの仕方もやっぱり一つの特徴だったんじゃないかなという感じがしますけどね。

田村眞生子：それは飛鳥田さんの、市の財政を使わないでなるべく色々民間の使うというのは、私は田村がそれは考えたんだと思ってましたけど、それは飛鳥田さんのですか…

二宮：いやいや、それは私はあまり分かりません。あの田村さんはもちろん自分でそういう戦略をつくってそれで市長に上げてると思いますから。

田村眞生子：そこのところが田村の特徴かと思ったんですね。市の税金を使わないで、民間の方たちをいれながらやっていくという、そういうやり方はちょっと珍しいんじゃないかと思うんですけども。それは飛鳥田さんよりも田村が考えたことだと私は思ってたんですけども、どうなんですか。

田口：飛鳥田さんというより、浅田さん…

二宮：いや飛鳥田さん、市長です。

田口：でも浅田さん自身もそういう発想を持っていたんじゃないんですか。違うんですか。

二宮：そんな具体的じゃなかったような気がしますね。

田村眞生子：浅田さんは市税を使わないでというか、そういう考えはあまりなかったんじゃないですか。それは私田村独特のものかと思っていたんですけども。

二宮：いや私はこれはよく分かりませんが。

田村眞生子：その辺はちょっとよく、研究してくださいね。

田口：鈴木先生も研究されてますけれど。

鈴木：すみません、仕事の関係で遅くなってしまって、今の件で言うと、環境開発センターが出したレポートの中に、当時はそういうものは無かったと思うんですけども、第三セクターのようなそういう組織をつくって、進めるというような、そういうふうに取り取れるところが出てくる。ここはおそらく環境開発センターだけで議論している話なので、おそらく田村さんのアイデアじゃないかな、というような感じ。そこら辺、浅田さんとういう議論をしたのかは分からないですけども、当時無いような事業実施方式をレポートの中に書き込んでいたことは確かです。それはおそらく飛鳥田さんとかそういうレベルの話では無いというふうに。

田村眞生子：そこら辺をね、どうぞ研究してください。

田口：そこら辺はこれから皆さんで細かくやっていかないと。

田村眞生子：田村が日本生命のような民間に勤めたということは、やっぱりそういう考えをもっていたのかなと私は思っていたんですけど。あんまり浅田さんの考えではないんじゃないかという気が私はしたんですけどね。

鈴木：すみません。今日のお話の中で「ニューヨーク港とその水際の運営」でポート・オーソリティの話が出てきて、非常に印象深かったんですけども、昭和39年の環境開発のレポートで港をどうやって運営していくのかということをもものすごくページの分量を割いている、と思うんですね。横浜自体は国営の直轄の港湾で戦前まできて、戦後になり自治体港湾というかたちになったんです。お金もないのに港をどうしようもない。港をこれからどうするのか、という基本的な方向性を求めるときにおそらくポート・オーソリティという考え方を横浜に当てはめたらこうなるんじゃないかと言うような、そういう提案だったというふうに、7つの提案の中のレポートに見えるんです。そもそもこの「ニューヨーク港の水際地域の運営」というレポートはですね、当時環境開発センターでそういった資料があって、それを参考にされたんでしょうか、浅田さんはそういうことを知っていたのでしょうか。

二宮：私はこの資料そのものを見ていないものですから、なんとも言えないんですけどもたぶん、このころ相当、要するにお手本はニューヨークのポート・オーソリティだと思うんですけども、あそこの資料なんかを調べていたような感じはしますね。成果物には

なっていないところで、ポート・オーソリティの機構図みたいなやつを見たことはあるんですよ。港湾とそれから空港とトンネルと、何かそういうカテゴリに分かれていて、こういうところで構成されるんだっていう話とか、それから港湾部門が全体でいうとあんまり高い比率じゃなかったということが書いてあるとか、そういうのは見たことがありますから、たぶんこの時点で相当そういう資料を調べたんじゃないかと思います。

鈴木：去年、鳴海正泰先生にお話を伺ったときに、田村さんがまだ市役所に入る以前に横浜市の総合計画をつくった時にニューヨークの **Change・Challenge・Response** という総合計画のようなものをずいぶん参考にして、書いたと。要するに情報の出所はあまり聞いてもよく分からなかったんですけども、なんとなく環境開発センターではないかなと思っていましたんですけども、そういう情報のチャンネルが当時あったんでしょうか。

二宮：そうですね、チャンネルと言えるかどうかは分からないんですけども、とにかく浅田さんはそういう情報というか、動きには敏感でしたね。今おっしゃった **Change・Challenge・Response** ですか、あれも私も聞いたことがあります。

鈴木：瀬底さんが非常に海外との人脈を持っておられたという噂は聞いたことがあるんですが、そのころはまだ？

二宮：瀬底さんはデザイン会議の頃から付き合いがありましたから、当然私がいた頃は付き合いがあって、コロンバスですかね、あそこなんかは瀬底さんが浅田さんに紹介したんだと思いますね。

氏家：楨文彦さんから随分アメリカの情報は得ていたと思いますけど、他からもあったと思いますけれど、楨さんからもらった情報はずいぶんあります。

田村千尋：浅田さんと明のこの3つの特徴、なんか総合性があるようで無いようで、特徴として最後に残ったのが、人を捌くのが上手かった、つまり頭からそういう構造になっていてやれたのかね。その環境開発の以前に生命保険、ニッセイにいた時代に得た人づかいみたいなものが生きていたのか、その辺がちょっと僕は面白いなと思っていたんですけども、総合性というか明が残っているのは実践的なところだけは浅田さんにはあんまり、無くて、明にはかなり特徴的に人を使ってものを動かすということの、人というか具体的にものを動かす感じ。だからもっと大きいところは浅田さんがやり、もうちょっと手を使わなきゃいけないところは明の方がやった、そういうふうな理解でよろしいでしょうか。

二宮：いや、もっと田村さんは**堺・泉北のケースのように**それこそ総合的なレベルでもう

色々なことを考えられていたと思うんですよ。浅田さんはどうして解決するかっていうとデザイン的に色々な発想があったなかで、こうしたほうがいいんじゃないかと。要するに総合化という言葉の内容が非常に問題だと思うんですけども、そのあたりがやっぱり、浅田さんだけの発想というわけでは無かったような気がしますね。

田村千尋：今の総合化という言葉はね、この研究会の名前にも使われちゃってるんですけども、英語にならないなど。英語にならない、日本語としても総合化ってよく考えてみると、なんだかよく分からなくて困ったなというところもあるんですけども、なんでしよう。totalize でもないし、何だか。

二宮：総合計画は comprehensive。

二宮：言葉の内容は難しいですね。総合性で何を言うかで。

田口：すみません、そろそろ時間なんですけれども、先ほど申し上げたように二宮さんはずっと横浜市とお付き合いされている方なんです。つまり田村さんがおられた時から、横浜市の変遷を見てこられた方なので、そういう話も面白いのかなと。ただそれを聞いているともう時間がありません。

二宮：じゃあ一つだけ。昨日ちょっとですね、実は来週、私の田舎は九州なんですけれども、九州でやっぱりこんな話を聞きたいという人たちがいてね、それで横浜市役所の行政資料室に行ったんですね、色々再開発の資料なんか見て、色々見ていたんですけども、みなとみらいのことについては雑誌というか、年に3回か4回かパンフレットみたいなものが出ていて、動きが分かるんですけども、港北ニュータウンは何の資料も出ないんですよ。私は6大事業の中では特に港北ニュータウンに色々思い入れがあるというか、自分がイメージしたことがちょっと入っているとかがそういうことがあるものですから、港北ニュータウンを少し調べたいと思ったんですけども、担当の人に港北ニュータウンの資料どこかに置いてあるんですかって聞いたら、色々調べてくれてですね、結局、横浜市史の中に書いてあるっていうんですよ。要するに港北ニュータウンっていうのはもう行政資料じゃなくて、歴史になったんだなっていうんで。

田口：港北ニュータウンの計画とかそういう資料は都筑区の図書館に系統的に整理されていますね。まあ、それは今おっしゃられたように行政資料室という一応行政の窓口であるべきところでどう扱っているかっていうところは非常に示唆が富みますよね。では、ご質問されていない方に一言聞いてみたいですが。

奥津：質問してもいいですか、途中から聞いていてちゃんと聞いていない部分もあるかと思うんですけども、学生の奥津と申します。この浅田さんのお仕事を見てみると、革新自治体のシビルミニマムの考え方と連携しているように思うんですけど、浅田孝さんのなかで、シビルミニマムという考え方に対する比重ってというのはどのくらいだったのか、その革新自治体の美濃部さんとか飛鳥田さんとかが目指していたものと基本的には同じ方向を向いていたのか、それとも浅田さんは浅田さんで別のことを考えていて、そういう革新自治体の人たちと連携していたのか、というのはどうお考えかということをちょっと知りたかったんですけども。

二宮：あの二ページの一番下にある「住居表示＝地区計画」というところなんですけれども、浅田さん自身は非常に地区レベルの計画というか、地区レベルの状況に関心があって、そういう意味ではシビルミニマムとたぶん同じ立場だったんだと思うんです。で、環境開発センターとはちょっと別なんですけれども、浅田さんは東京都の美濃部知事の参与をしていた時期があって、その時に「広場と青空の東京構想」の策定指導をしているんですけども、その「広場と青空の東京構想」の中で、大きなプロジェクトもあるんですけど、それと並行してシビルミニマムの空間化みたいな概念を入れている。そこでシビルミニマムと浅田さんの思想っていうのはつながっているんですね。要するにシビルミニマムっていうのはあの当時松下圭一さんが色々主張して、それを東京都が行政計画として受け入れてくれたんですけども、数値目標なんですよね。だからその数値目標だけでは地区の環境は不十分だという意識は浅田さんの中であって、これを生かすための空間化っていうのを考えていたと、そんな感じだったと思います。

田口：じゃあそういうことで、一応今日は予定の時間過ぎておりますが、私から申し上げますと、あまりに驚きがありました。これだけ話をお聞きし、色々意見を頂戴しても分からないものが尽きないですね。今回のをまず記録としてしっかり残させていただきながら、また機会を見て、我々研究会自体もさらにしっかり勉強をしたうえで二宮さん、氏家さんのお話をどこかの機会で聞いてみたいと強く感じております。というわけで今日は本当、ありがとうございました。